ブルゴーニュゆかりの人々

写実と幻想を織りまぜた作家 マルセル・エーメ

島野　盛郎

ブルゴーニュを愛した作家たち（5）

マルセル・エーメ

パリからブルゴーニュの首都ディジョンに向かってヨンヌ河沿いに東南に進むと、そのほぼ中間地点にジョワニーという町がある。

ブルゴーニュ地方の西北部でパリから150キロのところ。ここで20世紀のユニークな作家、マルセル・エーメ（Marecel　Ayme）が生まれた。正確な現実描写の中に幻想的な仮定を平然とはめこみ、読者に媚びないユーモアと新鮮な表現で独自の世界を築いたエーメは、いつまでも人気の衰えない作品を多数残している。どちらかというと長編より短編が得意で、戯曲や童話の傑作も残している。彼の『クレランバール』という喜劇は、かつて日本でも文学座で上演され、好評を博した。

今号ではこのマルセル・エーメについて紹介しよう。

新聞記者から作家へ

マルセル・エーメは1902年、ジョワニーに生まれ、1968年パリのモンマルトルで心臓発作で急逝した。66歳であった。その生涯は波乱に満ちている。父は蹄鉄工であった。エーメは六人兄弟の末っ子でめぐまれない家庭環境の中で育った。エーメの母は二歳のときに病死し、以来、母の実家・瓦工場を経営していた祖父母に預けられた。したがって両親の記憶はほとんどないという。

最初、エーメはエンジニアになりたいと思った。受験勉強をブザンソンの高校ではじめたが、病気で断念。20歳で兵役を終え、パリに出、食べるため、いろいろの職業を経験した。保険の外交員、映画の端役、石工、デパートの店員、市場商人の相棒など転々とし、最後に新聞記者になった。ところが新聞記者としては、余り認められなかった。無能のジャーナリストといわれた。彼はこういっている。

「見聞きしたことしか記事にできないのでダメな記者だった。せめて細部は脚色したり、でっちあげなければ仕事にならない世界だから……。おかげでたくさんの没原稿を書いてしまった」。しかし、新聞記者生活から、ものを書くことの喜びを感じるようになる。

1926年、処女作『ブリュル・ボワ』を発表する。筋は田舎の郡長にまでなりながら、アルコール中毒のため、浮浪者に落ちぶれたブリュル・ボワを主人公にフランスの田舎町（ブルゴーニュ地方）の生活を如実に浮かび上がらせたものである。この作品は好評で、さっそく文学者協会賞を受賞した。その後、記者を続けながら、いくつかの作品を発表、1930年『名前のない街』でポピュリスト賞を得たのをきっかけに、記者をやめ作家生活にはいった。1933年、『緑の牝馬』を発表、名声と地歩を確立した。

この小説は日常生活で普通気付かれない細部の描写を交え、比類のないフランスの農村生活を再現したものと評価された。馬の肖像画が屋内の男女の行動を報告し、人間の姿を伝えるという章をはさみ、着実な写実主義的手法に斬新なイメージを持つ文体で読者を魅きつけてやまない。映画化もされた。

ファンタジックな傑作『壁抜け男』

わが国の有名な作家・中村真一郎は『壁抜け男』というマルセル・エーメの短編集（早川書房刊）を訳しているが、そのあとがきでこう述べている。

「この本は本文から読みはじめて下さい。そうすれば私が、作者について、その作風などをこの『あとがき』で論ずるのが、バカらしくなっている気持が判っていただけると思います。この短編集について、訳者がなにか読者に向かって、巻末に蛇足をつけ加えようとすれば、もっともらしい理屈を列べるよりは、訳者自身がなにかエーメ風の出たらめで痛快で、悪ラツなウソの話をひとつ書いてみせるより仕方がないようなものです。――ということが、この本のなかのどの一編を読んだだけでも読者には納得いくでしょう」

この本には表題の『壁抜け男』のほか、『カード』、『よい絵』、『パリ横断』、『サビーヌたち』、『パリのぶどう酒』、『七里の靴』の６作品が収録されている。

「心優しきファンタジストが贈る奇想天外、痛快な物語集！」というリードがついているが、全くその通りで、筆者も思わず魅きつけられて一気に読んでしまった。

いま紙数の関係で全部を紹介することのできないのは残念だが、最もエーメらしい作品『壁抜け男』（Le passe-muraille）の粗筋を紹介してみよう。

――モンマルトルのオルシャン街75番地の4階にデュチュールという名前のすぐれた男が住んでいた。この男は不思議な才能の持ち主で、なんの苦もなく壁を通り抜けることができるのだった。鼻眼鏡をかけ、黒く短いやぎひげをはやしたこの男は、登記庁の3級役人であった。デュチュールが自分の能力に気がついたのは43歳の年になってからだった。この奇妙な能力は、彼がそうありたいと望んで生まれたものではなかったので、いささか彼を面くらわせたのも当然である。

そこで彼は近所の医者に症状を打ちあけると、2種類の薬を服用するように指示された。最初の一袋を飲んだのち、あとは全部、引き出しにしまって飲まなかった。ということは壁を通り抜ける能力を保存したかったわけだ。

彼の勤める局の次長が転勤となり、新しい次長がやってきた。彼はデュチュールを無能とののしり、事務室の隣の物置小屋に閉じこめ、そこで仕事をするように命じた。頭にきたデュチュールは次長の部屋との境の壁に入った。そして次長の部屋へ壁から頭を出し「次長はバカでトンマでならず者だ」と怒鳴った。デュチユールの頭を見た次長は恐怖におののいた。それをデュチュールが毎日、繰り返したので次長はとうとう発狂し、精神病院に入ってしまった。

デュチュールは得意となり壁抜けで悪事がしたくなった。セーヌ河の右岸にある大銀行へ行き、1ダースもある壁や仕切りを通り抜け、金庫をこじあけ、多額のお金を盗むことに成功した。帰りぎわ、赤いチョークで＜狼男＞と仮名のサインを残した。翌日、あらゆる新聞に事件が大きく掲載された。それに気をよくしたデュチュールは毎晩のように銀行や宝石商や金持ちの邸宅などを舞台に荒し回った。警察を鼻先であしらい、つぎつぎに手柄を立てる＜狼男＞に夢想家の女性は、身も心も捧げたいと憧れるまでになった。

役所でも＜狼男＞の話でもちきりになった。

デュチュールは「ねえ諸君＜狼男＞はこのわしだよ」といったら周囲は爆笑した。こんな男が＜狼男＞だなんてと、だれも信じてくれないのだ。数日後、＜狼男＞は宝石店に入り、夜警にわざとつかまった。デュチュールは自分が＜狼男＞であることを、みんなに知らせたい欲望にかられたからである。

翌日、新聞がデュチュールの写真を掲載すると同僚たちは腰を抜かさんばかりに驚いた。しかし、そのために刑務所に入らなければならなかった。それでもデュチュールは平気だった。簡単に刑務所の壁や塀を抜けて町に出た。

町を歩いているうち、ブロンドの美人に惚れこんでしまった。声をかけると美女もまんざらではない風情で話に応じた。美女は人妻でやきもちやきの主人にうんざりしていた。主人は外出するとき、美女を部屋に閉じこめ、二重にカギをかけ、窓のよろい戸にまで南京錠をおろすのだという。そのくせ主人は浮気をして、夜はほとんど帰らないと報告した。「それじゃ、今夜、ぼくがたずねるよ」とデュチュールはいい、ノルヴァン街の家に塀を越え、壁を抜けて行き、囚われの美女の部屋に入った。美女は熱狂して彼を迎え、2人は夜のふけるのを忘れて愛しあった。

翌日、デュチユールは頭痛に悩まされた。そこで引き出しの中にあった例の薬を午前と午後、一服ずつ飲んだ。頭痛がなおったので、また美女との密会を楽しんだ。帰るとき美女の家の壁や仕切りを通り抜けながら腰や肩がいつになく、こすれるような感じがした。続いて厚い塀の中に入ったとき、彼の体は動かなくなってしまった。突然、あの薬を飲んだことを思い出し、ぞっとした。こうしてデュチュールは塀の中に閉じ込められてしまったのだ。その終わりはつぎのように表現されている。

「・・・いまでもまだ、彼は石になってしまわないでそこに入っているのだ。パリの街のどよめきが静まった深夜、ノルヴァン街を通る夜遊び好きの人たちは、きっと墓の彼方から聞こえてくるような鈍い人声を耳にするだろう。彼らはその声を、ビューと辻で吹きすさぶ風の音と思うだろうが、それこそ輝かしい生涯の終わりをなげき、あまりに短かった束の間の恋を悔やむ＜狼男＞デュチュールの泣き声なのだ――」

筆者の説明ではその面白さは伝わらないかも知れないが、奇抜な幻想と現実世界の重い構造がうまく織りまぜられ、その作術は感心するほかない。エーメは戦後、前述したように戯曲のほうにも進出し、『クレランバール』、『他人の首』、『四つの真理』、『月の小鳥たち』の戯曲を発表、各地で上演され絶賛された。童話の分野では均整のとれた一連の童話『おにごっこ物語』、大人のためのすぐれた童話『とまり木の猫の話』などが注目作となっている。

マルセル・エーメはフランス文学史上の巨匠・大作家といわれるほどの存在ではない。しかし20世紀に出現したファンタジックな魅力ある作家としての名は忘れ去られることはないだろう。ブルゴーニュとパリを主とした小説、戯曲、童話の数々はこれからも多くの読者を獲得するにちがいない。

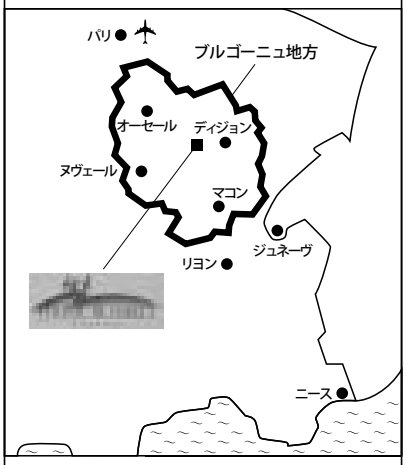
ジョワニー　Joigny

島野　盛郎 / しまの・もりお
1932年生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒業。54年、ダイヤモンド社入社。雑誌記者、出版局デスク等を勤め、現在、フリーライター。「伝記研究会」幹事。主な著書に『夢の中に君がいる―越路吹雪物語』（白水社）、『食を創造した男たち』（ダイヤモンド社）などがある。

Château de Chailly / シャトー・ドゥ・シャイイ

ブルゴーニュへようこそ。

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしゃいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や、小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。



お問い合わせ↓
（株）佐多商会ヴィタリテ事業部　担当：岩沢
Tel.　03　3582　5087